

幸せはアンプラグド

川津羊太郎

アンプラグド [unplugged]

○デジタル大辞林より

⤵プラグを抜いたの意。電気楽器やアンプを使わない演奏。

○音楽用語辞典より

生楽器だけで演奏すること。(電気を使わないので)プラグを通さない、という意味。もとはアメリカのMTVのコーナーで、有名アーティストが多数出演してアンプラグド・ライブ・アルバムを出し、ブームになった。単なるアコースティカルな音楽というより、既存のヒット曲のアレンジを変えて違う雰囲気が楽しめるのが魅力。

⤵アンプラグドとは、語の成り立ちが示すとおり、既成の⤵プラグドなモノやコトへのアンチテーゼである。では⤵プラグドとは、どのような状態であろうか？

語義としては、プラグにつながれた状態のこと。つながれたプラグによって楽器やアンプは電力を与えられ、奏でる音を増幅させ、さらには音そのものを変質させたりする。

プラグドな音楽は豊かで魅力的であるが、電力なしに成り立たないという点で不自由でもある。これは、音楽を生活と言い換えても成立する。

プラグドな生活は豊かで魅力的であるが、

電力なしに成り立たないという点で不自由でもある。

この戯曲は、プラグドな生活／様態を描き、そこからさらにもう一步踏みこんで、ぼくらという存在がそもそも⤵プラグドであるということを提示したいと企むものである。

電飾男現るあらわ

暗闇に光りが灯る。

色とりどりの光りの明滅——それはクリスマスツリーの電飾である。

（明かりつく）

裸の男が立っている。

彼はクリスマスの電飾を体にぐるぐると巻きつけ、スマホを空中に掲げている。

どうやら必死に電波を探しているようだ。電飾がピカピカ明滅しているのは、長く伸びたコードが壁のコンセントに挿さっているからである。

男は、スマホの電波を求めて歩き回る。

が、しばしばコードに引っ張られ、舌打ちをうつ。よく見ると、男は寒さに震えている。

ふと、男が何かに気づいて驚く。

「わアッ。——えッ？ あ、あの、すみません！

誰かに見つかってしまったようだ。

「いや、違いますよッ？ 違うんです、イヤ違うようには見えないだろうけど、聞いてください、本当に違うんです！ あの、分かってもらえないの覚悟で言わせてください。怪しい者じゃありません！ ……（相手が無反応だったらしく）うん分かります。分かりません。見えませんか？ 怪しい、ですもんね、コレどう見たって。事実としてコレ怪しいですもんね、ハイ。それはもう、ハイ。でも待つてください、聞いてください。…理由！理由を聞いてもらえれば、納得してもらえらると思うんです、なんでこおくんなことになつてんのか。5分！ 5分だけぼくにください！

相手の反応を窺うが、やっぱり無反応らしい。

「…あの、大丈夫ですかね？ 話してもよろしいか、5分だけ？ …否定も、頷きもされません

が。一応、人を呼びに行かれないということは、5分間をぼくにくれるんだと、解釈してしましますが、よろしいか? ……いっこ頷いてくださると、嬉しいんだけどなア。今ぼくとっても不安な状態でして……あ、イヤすいません! ちょっとこの電飾がまぶしくてですね、そっち側ちょっと暗くてですね、もしかして、頷いてらっしゃるんでしょうか、だとしたらすみません。あの、ハイ、じゃあ言います。話しますね、なんでこんなことになってんのか。えっと、何から話せばいいのか……

「あの、この裏の山のずっと奥のほうに、マシラ湯っていう秘湯があるんですが、ご存じですかね? マシラ湯。なんか、すごいまっしろな白濁湯で、それはもう、カラスが飛びこめば白鳥に変わっちゃうほどなんですって。うな……ずいてんのかな? あの実はぼく、旅行者でして。さっきまでそのマシラ湯に向かってたんです。いや辿り着けなかったんですけど結局。ハイ、じゃあなんで裸なのか、って。それはちょっと一言じゃ語れない経緯がありまして……や、話します! ちゃんと順を追って話します!

「えっと、まずぼく……今朝フラれたんですね、彼女に。ハイ。…あ、イヤ違いますよ? 今、『こんな格好の奴フラれて当然』みたいな感じ、出しましたよね? ぼくそういう気配には敏感なんです。でも違いますよ? 普段ぼくこおくん人間じゃないですからね? イヤ『こおくん人間』がどんな人間か、よく分かんないけど。——え? じゃあ何でフラれたかって? それは——(と、言い淀んで)いや、もちろん理由、聞きましたよ。ハイ。彼女に。

男、スマホに向かって、

「え? え、え、ちょっと待って。え何だよそれ? 急に何よ、別れるって。いや別れるって何よ、突然。え、今そんな話してなかったでしょう? なんて急にそんな話なんの? ——え、分かってる? 君が行きたがった温泉旅行なんだよ? オレが宿さがして、オレが予約して。ホントに分かってる? 出発日、今日なんだよ?」

「イヤごめんちょっと整理しよう。今日が旅行の日だったこと忘れてたわけじゃないよね? ……だよ、何日も前からその話してたし、昨日もラインで確認したもんね。で? うん、いつまで経ってもウチに来ないから、まあ遅刻はもう慣れっこだよ、でもフツーはそっちから連絡してくんじゃん。なのに何の連絡もないから。こっちだって心配になるじゃん。なるよ。で、こっちから電話したら。何? 遅刻の言い訳するでもなく、いきなり『別れたい』って。え、ソレはどういうアレなの? ……うん、オレに? 悪くて。電話がでなかった? —— 出発日、今日なん

だよツ？

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「……なんて切るの？ うん——声が大きくなったから？ そりや声も大きくなるでしょうよ。イヤ、ま、落ちついて話しよ。とりあえずさ、こっち来いよ。で、話し合いをしましょう。…なんて来ないの？ じゃこっちから行こうか？ ……会うと？ 怖い？ 何が怖い、オレが怖いですか？ オレ一度でもきみに手を上げたことがありますか？ うん、ないですよ。——じゃあおかしくないですかツ？

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「……だからなんで切るの？ うん——声が大きくなったから。イヤきみの言ってること、もう滅茶苦茶だからね？ だいたいなんでこのタイミングなのよ？ 今日、クリスマスイブなんだよ？ 一番なくないですか、別れ話するタイミングとして。何？ ……イブを一緒に過ごしちゃいけない気がした？ なんだそれ。……このまま旅行に行ったら、いけない気がした？ ——当日はキャンセル料100パーなんだよツ？

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「え、きみのスマホ、リミッターなんか付いてんの？ イヤ切るなって。うんキャンセル料とかの問題じゃないのは分かってるよ。でもね、それにしてもなんだよ。まだ！ まだね。昨日だったら50パーだったんだよ？ いったい誰の金だと思ってんだツ！

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「……ゴメンなさい今のは違うよね。うん、今のはオレが間違えました。でも突然切るのはなしだって。それはだってきみ卑怯じゃん。こっちも『ハ』てなるから。うんなるよ『ハ』て。突然切られたらなるよ『ハ』て。…なに、気持ち悪い？ なにが？ オレの『ハ』が気持ち悪いか？ 「うん気持ち悪い」 って……え、なんでそんなふうになっちゃったの？ ——じゃあ理由は？ 別れたい理由！ そこはさ、ちゃんと話そうよ。もう電話でもいいからさ。会わなくてもいいよ。言ってる。

「……え？ ……ゴメンもいっかい言ってる？ ……ゴメンもっかい。

「『生活の方向性の違い』？ え何それ？ 生活の方向性の違い？ 生活の？ 方向性の違い？ ……エそんな言葉あんの？ イヤ音楽は聞いたことあるよ。大抵のバンドが辞めてくやつでしょ？ 芸人とかでも聞いたことあるよ、お笑いの方向性の違いって。え生活に、方向性があるの？

「(スマホから耳を外して) イヤ聞いたことあります？ 生活に、方向性があるんですって！ はい、それが今朝のことです。…イヤだからそんなときはこんな格好じゃないですって。それじゃただの変態じゃないですか。——ぼくは変態じゃないッ！

「あ、イヤ大きな声出してすいません。でも違うんですって。ぼくは変態じゃないし、そんなときは普通に服、着てました。初めての温泉旅行だったんすよ、彼女との。だからちょっと気合い入れて、パリッとした服。…着てたのになア！

男、奥のクローゼットへ歩いていき、衣装チェンジ。

電飾はピカピカしたまま、置かれていたマネキンの体に巻きつけられる。

男の衣装チェンジ完了と共に、電飾が消えて——

電力！電太郎の独白

未来的なプラグスーツを着た男が、前に立つ。

彼は、かつてワンクールだけ放映された『電力！電太郎』というアニメの主人公である——あるいは、そのコスプレをしただけの誇大妄想者、かもしれない。

「みんな、電気を大切にしているかい！ オイラ電力！電太郎。西暦3020年からやって来た未来人さ。3020年、といえば、そう！ 二度目の東京オリンピックが開催された、ちょうど千年後さ。あの東京大会の素晴らしさは、千年後も伝説として語り継がれてるぜ。

「今日はみんなに、千年後の世界の素晴らしさをちょっとだけ紹介しようと思ってきたんだ。そしてこんな時代だからこそ、声を大にしてみんなにこう伝えたい。オイラ達には輝かしい電力と未来があるってね。

「まず、今栄えてる文明はいつたん全滅するよ。と言うか、西暦3000年までに人類は2度ほど絶滅しかけるのさ。でも安心してほしい。人類はマジで不滅だから。そう、電力があるかぎりね！

「今オイラ達が暮らしてる地球はね、見渡すかぎり大自然が広がってるんだ。まさに太古の地球だよ。じゃあ人間はどこにいるのかって？ うん、人類は地上を放棄して以降、地下で暮らしているんだ。そう、オイラ達は決して地上に出ちゃいけない種族だったんだよ。

子どもの落書きのような未来図が映しだされる。

未来図1. 地球の内部に、いくつかの地下都市がアリの巣のようにつながり、円環をなし、それぞれの都市には笑顔の人間が描かれている。

「これがオイラ達の住む世界だ。地下にはいくつもの都市があって、それぞれの都市の中心には都市核と呼ばれる電力の核がある。核からは電力チューブが伸び、住民はみんなそのチューブをプラグスーツにつないで生活してるんだ。

未来図2. 都市核からいくつものチューブが伸び、笑顔の人々のプラグスーツにつながっている。

「このプラグスーツは優れものさ。オイラ達の生命維持に関するすべてをアシストしてくれるんだ。生体管理、健康維持、自律神経の調整、体臭抑制、危険感知、衝撃緩和、耐熱、滋養強壮、筋力補強——オイラ達はこのプラグスーツと電力チューブと都市核をつうじて、文字どおり都市とつながって、みんなが一体となって生活してるんだ。それは本当に幸福なことさ！ オイラは都市のために、都市はオイラのために、ってね。

「もちろん今のきみたちから見たら、オイラ達の生き方は、ちょっと不自由に見えるかもしれないね。でも逆だよ。ちょっと想像してみて。」

未来図が消える。

「目が覚めたら体がだるい、そんな朝がない世界を。病気がちで学校に通えない、そんな不幸がない世界を。腕力で敵わないから服従しなきゃいけない、そんな格差がない世界を。老いも若いも、男も女も、体格や体力や筋力の差がなんの意味も持たない世界。そう、すべては電力が解決してくれるんだ。偉大なる電動アシストさ。このプラグスーツのおかげで、オイラ達は誰だってこの時代じゃスーパーマンだ。でもそれだけじゃないよ。」

未来図3. さきほどの地球内部の地下都市の絵に似ているが、今度は脳内のシナプスの略画である。

「これはみんなの脳ミソの中を描いた絵だ。みんなの脳ミソでは無数の神経細胞がネットワークをつくって、そこで様々な化学物質がニューロンの発火を引き起こし、その情報を電気信号として伝達し合うことでオイラ達の思考が生まれることはみんなもすでにご存じだよね。」

「つまりオイラ達の思考や感情の正体は、脳ミソのなかの電気信号なんだ。分かるかい？ きみらやオイラの感情って、じつは電気なんだ。と、ここまで言えばもう分かるよね。そう！ このプラグスーツは、メンタルもアシストしてくれるってわけ。」

「オイラが現代に来て一番おどろいたのは、みんなの感情や感性がとも不自由だってことさ。プラグにつながれてる未来人なんかより、よっぽど不自由な時代だよ今は。だってみくんな不平不満、不愉快、不機嫌、不幸せ、そんな負（不）の感情に支配されて生きてるんだ！ びっくりするよ。どうせ支配されるんなら、幸せに支配されて生きるほうが絶対いいと思わないかい？」

未来図4. プラグスーツからプラグを引き抜く人たち。

「とは言え、未来人の全員がこのプラグスーツを受け容れたわけでは、もちろんなかったよ。」

プラグ管理を全体主義だと言って、自然の姿に還ろうと呼びかける人たちもいた。いわゆるプラグレスの人たちだね。

「でもいいかい。プラグスーツはべつに未来人の義務じゃないんだ。着たくなきゃ着なくていいし、プラグを引き抜きたきゃ引き抜いたっていい。でも、原始的な電力利用しかしてない現代でさえ、電気なしで生活できる人が一体どれだけいる？」

「未来じゃ尚更そうさ。理想と現実が違う。プラグレスな人たちの集団は、未来でもしばしば発生するんだけど、百年と長続きはしないんだ。いつだって集団の内部で権力争いが生まれて自滅していくからね。それでオイラたち未来人は何千何万何億という失敗に学んだんだ。人類の決め手は、電力だったんだって。」

未来図5. 宇宙に浮かぶ胎児のへその緒が電力チューブとなっている。胎児は安らかな顔で眠っている。

「だってオイラ達の都市には、権力争いなんてないんだ。心がケバ立って眠れない夜だってないし、人間関係で転職することだってない。だって幸せは常にプラグから供給されてるからね。だからね、オイラは自信をもってこう言えるよ。プラグにつながれてるオイラの時代こそが、人類史上もつとも幸福で自由な時代だって。」

「だからいいかい。みんな、これからはもっと電気を大切にするんだ。そしたら、自然とこういう気持ち湧いてくるはずさ。多少電気料金が値上がりしたって文句を言っちゃいけない、って。その通り！ だって電力は、人類みんなの大事な財産だからね。」

アニメ番組の「提供」として、東京電力のロゴマークが映しだされる。

「それじゃあみんな、電気と、その電気を守ってくれてる電力会社をくれぐれも大切にね！ アニメ『電力！電太郎』はご覧のスポンサーの提供でお送りしました。挑戦するエナジー、電太郎でした。それじゃまたな、グツバイ、シーユー、ジゴワット！」

男、奥のクローゼットへ歩いていき、衣装チェンジ。

電気っ子気質

”パリッとした服”を着た男が、スマホで通話している。

「イヤだからさ、分かんないんだって。うん…その、生活の方向性ってのがさ。なによ、生活の方向性って。具体的に言っよ。…言ってくれなきゃ分かんないでしょうよ。…うんだからね、譲歩できるところがあればさ、当然オレだって譲歩はするし。…イヤ言ってもムダって。ムダかどうかは言ってみなきゃ分かんないでしょッ！」

またスマホを切られるが男はもう慣れっこ。何事もなかったようにかけ直して、

「うん。うん言っよ。うんいいよ何？…ハイ。…料理を？…ガスで作りたい？料理をガスで作りたい？——え、何それ。それが君の言う、その、生活の方向性の違いなの？料理をガスで作りたい？なんだよそれ。料理をガスで作りたいって——そんなの絶対ダメに決まってるだろうッ！なに考えてんだお前ッ！」

通話を切られたらしい、スマホを耳から外して、

「(観客に向かって)おかしくないですかッ？ガスで料理って——

」ぼくは昔っから電気っ子でした。電気っ子。なんていうか、電気にもものすごく愛着を感じるといっか、安心感があるというか。だっって電気に対して、ぼくらって、感謝しなくなってますか？「たとえば、ぼくはノーマルな自転車に乗ったことがあります。しよっぱなから電動自転車スタートだったんで。実家はオール電化でした。子どもころ、電池を入れると玩具が動きだすのを知ったときの感動を今でも憶えています。電池を舐めて、舌がピリッとなるのが癖になった時期があります。赤ん坊のとき、ぼくは電動揺りかごのゆらぎのなかで眠っていました。そしてLEDライトの光りが、そんなぼくの成長をずっと照らしてくれたんです。実家じゃIHコンロで調理された料理しか食べずに育ってきたんです！」

「分かりますか？電気は、もうすでに、ぼくの体の一部なんですよ。」

「それを何……ガス！ ガスって！ ガスで料理、って……。あの、ぶっちゃけ、食べ物をごガスで焼いたり煮たりするとか、気持ち悪くないですか？ 分かりますよね、この感覚？」

「——数日前のことです。」

男、彼女の部屋を来訪する。

初めて彼女の部屋に招かれたので、ちょっと浮いている様子。

「おじやましませーす。……あ、なに、すごいイイ感じの部屋じゃない！ わー（と周囲を見回す）ここがきみんちだ。……なに？ 恥ずかしい？ 何が恥ずかしいの？ 恥ずかしくないよ、ホントいい感じだよ。うん、照明も明るいし、家電の揃えも悪くないし、あ、ルンバもあるじゃん。カーワイ。」

「アハハハ、分かったって。大人しくしてるよ。……じゃ、ここ座るね。（と、上着を脱いで）あ、ありがと（と彼女に渡す）。」

男、テーブルの上のリモコンを一つずつ手にとり、「あ照明ね」「これはエアコン」「ブルーレイはSONYか」などと呟きながら、明るさを変えたり、送風温度を変えたりする。やがて、テレビのリモコンでテレビをつけ、

「お、温泉。（キッチンの方から戻ってこない彼女に向かって）——ねえ、これ、今度いく温泉、映ってるよ！ 猿がほら、露天に入ってるよ！（彼女が戻ってきたらしく）うんお猿さん。あ、ねえ知ってる？ こういう温泉に入ってるお猿さんってさ、見てほのぼのすんじゃない。うん。でもじつは、コレってこの猿たちの最期の姿なんだって。」

「……うん、なんかね、お猿も寒いからつい温泉に入っちゃうらしいんだけど、当然、入ったあとは濡れたまま外に出るわけじゃん。そしたら……そう、ほとんどの猿が凍死しちゃうんだって。うんテレビじゃそこまで放送しないもんね。怖いよねエ。残酷だよネエ、自然は。——いやゴメン、へんな話したね、やっぱ浮かれてんのかな？ ……うん、ハイ、ちょっと待ちませーす（と、彼女がふたたびキッチンのほうへ）」

「——え、なにしてんの？ え手料理？ 作ってくれてんの？ （彼女が近づいてくる）味見？ するする。うわ、すげーじゃん。（小皿でシチューを味見する）うん……うん、うん。……うん。」

「うん美味しいよ。マジで。うん——ワン？ あゴメン、ちょっともう一口、味見していい？ イヤ美

美味しいよホントに。美味しいんだけど……ごめんね。(彼女がキッチンスペースに行き、小皿をもつて戻ってくる、それを受け取って) うん……うん、うん。……ウン?

「あ、ごめん。美味しいは美味しい。ホントに。ただ……何だろ? なんか火加減が、九電っぽくないっていうか……あ、ここ新電力つかってる?」

「新電力。イヤ新電力。イデックスとかLOOPPとかよかエネとかエルピオとか。分かんない? え、どこと電気契約してるか、なんか書類とかある?」

「あるよ、イヤ関係あるよ。うん。味と、電力会社。……いやね、おんなじIH使っても、電力会社でもうぜんぜん違うんだから。」

「え? え、ゴメン、もいっかい言って。——は? ……ガス? プロパン? ……プロパン。プロパン? を、使って、料理をしているの? ……いまどき?」

「あゴメン。ううん、そういうんじゃない。イヤそういうつもりじゃないんだけど。ゴメンね。ちょっと、びっくりしちゃって。——イヤしょうがないよね。だって、ここが、そういうマンションだったんだもんね。それはしょうがない。しょうがないよ。うん——うん。」

「ん? あ、料理もうすこしかかるから? 先にシャワー。あ……うん。浴び、ようか。」

「…シャワー、も、ガスだ……よね。イヤごめん当然そうなるよね。うん、うん。」

「(彼女に聞こえないように) ガス…シャワー…ガス…ガス……」

「ごめん! やっぱオレちょっと今日は帰るわ。」

男、彼女の部屋から逃げるように立ち去り、空を見あげて立ち尽くす。

そして噛みしめるように——

「生活の、方向性の、違い……」

男、固いものを飲みこむように、その事実を何度も咀嚼する。

「……あの、ガスの匂いってあるじゃないですか。あれ、ガスって、ホントは匂いとかしないらしいんですね。ハイ。じゃあ、あの「あれ、なんかガス臭くね?」っていう、あの匂いは何かというところ、ガスを漏れしたときにすぐ気づけるように、人工的に付けてる匂いなんですって。本当はガスって無味無臭なんですって。(不快に顔をゆがませて) マジで、ターシャリーブチルメルカプタンとかジメチルサルファイドとかシクロヘキセンとかテトラヒドロチオフェンとか使ってわざわざ人

工的に臭くしてるガスってほんつとマジで滅茶苦茶キモいと思いませんかッ？

と吐き出すだけ吐き出して、男、奥のクローゼットへ。衣装チェンジ。

地元の風習

熟女だろうか、女装家だろうか、かなり派手めのドレスを着こなしている。

そんなママが、カウンター越しに常連客と会話している。

「アタシってさあ、ホラこう見えて、財布と小銭入れ分けるヒトじゃない？ 知らない？ 興味ない？ ナニよそんな哀しいこと言わないでよ。そうなの。分けるヒトなのよアタシは。…だから財布と小銭入れの話でしょうが！

「いいからちゃんと聞きなさいよ。こないださ、コンビニのレジでね。お会計のときに小銭入れだしてパツて見たら、中身がさ。わざとじゃないのよ？ 小銭入れの中が、なんと、ぜんぶ五十円玉だったの！

「キモくない？ 五十円玉よ？ ちょっと想像してみてください。コンビニでさ、レジで、小銭入れ出すじゃない？ でフタ開けて、中見たら、五十円だらけ。さぐってもさぐっても奥から五十円玉。これある意味ホラーよね。

「ま、それはいいんだけどさ。それで思い出したのがさ。アタシの地元ね、人類五十円おじさんってヒトがいたの。人類五十円おじさん。それをひっさびさに思いだして、個人的にナツカシーってなっちゃって。うん、人類五十円おじさん。いわゆる何ていうの、地元の名物おじさん。的な。

「うん。いっつも駅前でね、こういうでっかいズタ袋かかえて、通行人に声かけんの。「人類か？」「アンタ人類か？」——たいていの人はスルーしてくわよ当然。スルーしてくんだけど、たまにこう、タイミングがバツと合っちゃうのかな、なんかそういう間の悪い人っているじゃない。で、つい立ち止まっちゃって、そしたらおじさんも勢いづいちゃって、「人類か、人類か？」って畳みかけてきて、そしたら仕方ないじゃん、「はい、人類です」。

「そしたらおじさん、ズタ袋の中から五十円玉を一枚だして、ホイって渡してくんの。え、何？ って顔上げたら、もう他の人に「人類か？」「人類か？」ってやってて。

「(一口お酒を飲んで) …だから、人類にご褒美をあげたいんじゃない？ なんて五十円か？ アタシが聞きたいわよ。…そうよ、持ってるズタ袋のなか、ぜんぶ五十円玉よ。確かめたわけじゃないけど。…だから本人に聞きなさいよ。来る？ うちの地元。なんだったらアタシが案内してあげよっか。で、ついでに両親に紹介するわよ。

「冗談よ。本気で拒否しないで。地味に傷つくから。——ま、アタシがまだ学生とかの頃の話だから、あの名物おじさんも、もう死んじゃってるだろうけどね。うちの父ちゃんもとっくに他界してるし。うん、母ちゃんは独り寂しく、クソ田舎でつぶれかけた個人商店やってるわよ、細々と。独居老人よ、独居老人。

「…ゴメンなさい、なんかしんみりしちゃったわね。

「(客のグラスにビールを注いで) アンタはないの？ なんか、そういう地元の名物おじさんの。…ない？ いっこくらいあるでしょ？ …じゃヒトじゃなくてもいいわよ、コトでもモノでも。なんか風習的な。うん地元の変わった風習とか、自分ちだけの変わった習慣とか。

「…アンタさんま御殿見たことないの？ テーマトークよテーマトーク。なんかあるでしょ。なんでもいいわよ、こんなのただの暇つぶしなんだから。

「うん、何、ちょうだい。…充電器。ケータイの充電器？ あ充電するときのコードね、コンセントに挿す。…を？ 埋めるの？ 庭に？ あるじゃない！ 変わってるじゃない！ いいわよ、何それ？

「うん。機種変したとき。あ買い替えたときとかに。埋めるの？ 庭に？ え、それは何、ほら子どもんときにさ、抜けた乳歯を屋根に投げたりしたじゃない。下の歯は屋根に、上の歯は縁の下に、みたいな。そういうアレなの？ ノリなの？

「ア分かんない。分かんないんだ。え、それはアンタんちだけ？ アみんなやってたんだ。地元じゃみんな？ じゃあもうアレだ。本格的なヤツだ。

「うん、うん、昔は？ 充電器じゃなくて、電話線？ 家の電話の電話線？ あ電話機のコードをね。を埋めるんだ？ 買い替えのときだけじゃなくて。身内で不幸があったときとか？ え何それ。変わってるわ。エどういうアレなの？ どう解釈すればいいの？ アタシは。ゴメン興奮してきちゃった。なんか言い伝えとかかないの、それに関して？

「アもっと前。もっと前もあるんだ。電話線のさらに前。…糸電話を埋める。え何、アンタの地元、

なんか電話に恨みでもあんの？ いやまあ恨みじゃないだろうけどさ、なんか、感じるわよね。並々ならぬこだわりを。うん電話に対して。イヤ「何それ」じゃないよ。こっちが聞きたいわ。

「え？ なに、さらにもっと前があんの？ 糸電話の前？ アンタそういうのは、まとめて云いなさいよ、なに小出しにしてんのよ。なに私の好奇心を翻弄しにきてんのよ。」

「で何？ ……死んだ人の？ ——髪の毛。…何それ。急に恐くなったじゃない。ううん、いいのよ。そういうのもアタシ好きよ。」

「なに、亡くなった人の髪の毛を、庭に埋めるのね？ ケドそれはまあ、なんか分かるわよね、風習的には。いやニュアンスはさ。要は供養的なことでしょ？ それが、時代をくだって糸電話になつて。電話線になつて。で充電器になつて。え、アンタの地元、どっかでバグった？」

「まあ——でも糸電話までは、分からなくてもないか。アレでしょ？ 昔のことだからさ、長い髪の毛を糸電話にして遊んだり、してたのかな？ で、亡くなった方と生前のように話してみたい、通信したい、みたいのがあったんじゃない？ ロマンチックじゃない。知らないけど。」

「それがまあ——昭和になつて、電話線になるか。時代がくだっちゃうと。そこはどうしても。死んだ人と話したい、っていう想いは、時代が変わっても一緒だもんね。」

「で、充電器よ。問題は。なんで充電器？ ケータイ本体を埋めるならまだ分かるわよ。意味的につながるわよ。充電器。充電用のコード。」

「なんでそっちに行っちゃったわけ？ まああそうね、アンタに云つてもしょうがないわよね。…アレか、コードに引張られたか。…イヤだから、髪の毛、糸、電話線ときたから、コードの方にこう、寄せてきたんじゃない？」

「じゃあもうアレね。どのみちさ、時代が完全にワイヤレスになったら、その風習も廃れちゃうね。だってもう埋める線がなくなるんだもん。それがワイヤレスだから。コードもレスよ。うん、そう。時代の流れは止められないもんね……」

「(一口お酒を飲んで)…ゴメンなさい。結局なんか、しみりしちやったわね。」

……………イヤ充電器で！

ママ、律儀にグラスを片づけ、カウンターの upper を拭いて(そんな仕事)、奥のクローゼットへ歩いていき、衣装チェンジ。

何もうまくいかない日

暗闇のなかで、マネキンに巻かれた電飾がピカピカ光りだす。

(男は、マネキンの背後の暗がりにも紛れている)

「えっと、どこまで話しましたっけ？ あ、そうか。ガス。ガスで料理。(やっぱりまだしっかりと飲みこめないみたいで)ガスで…料理…ガスッ！」

「イヤしません、だからまあ、生活の方向性が違った、んでしょね。彼女の言うとおりに。

…ま、納得はしちゃいましたよ。だってガスとは、生活できませんもん、いまさら。

「で彼女との電話切って、もうなんかぐったり力抜けちゃって——でこれからどうしようかな、って考えたときに、パッと頭に浮かんだのが……キャンセル料—00パー。」

「やだってそっちは納得できてませんか！ 小っさい男だと思われるかもしれないけど。だって向こうが温泉旅行行きたいって、宿とかぜんぶオレが調べて、予約もオレがして、クレカ決済もオレがして、で当日フラれて、キャンセル料—00パー——って。鬼か！」

「だからオレ、行くことにしたんすよ。温泉旅行。ハイ。もう一人で。」二人の初温泉旅行“を、一人で。行ってやる！”と思って。こんにゃろ！”と思って。そしたら何かへんな気力湧いてきて。

男、電飾マネキンを後ろから抱え、声に合わせて動かす。

「荷物抱えてタクシー乗って、乗る予定だった特急飛び乗って、座る予定だった指定席すわって、二人分だからもう、こっんなですよ。こんなとか、こんなとかして、そしたら後ろの席のおばちゃんにメチャクチャ怒られて。(電飾マネキン、しょんぼり)

「で、そしたらですよ。目的地の駅の、二つ前くらいかな、電車がすすす……って停車したんですね。あれ？ ここ特急停車する駅じゃなくね？ って思ってたら、アナウンス。

『えー、只今、送電線の断線事故により、電車が一時不通となっております。ご乗車のお客様に置かれますは、お急ぎのところ大変申し訳ございませんが、車内にてしばらくお待ちいただきますよう——』

「マジで重なるときは重なるもんですねエ嫌なこと！で、二十分待っても、三十分待っても何も変化なし。イヤいつもならね、待ちますよ。大人しく。でももう今日という日には無理だ！オレは電車を飛び出しましたよ。後ろの席のババアもびっくりしてましたよ。

「ヘイタクシー！てなもんで、駅から飛び出したはいいものの、そこは田舎の無人駅、タクシ―なんて見る影もない。でもね、もう後には引けません。オレも男だ。ハイ、歩きました。2時間55分。もうクタクタっすよ！朝からフラれて電車止まって宿まで歩いて2時間55分。でもね、今日という日はまだまだこんなもんじゃありませんよ！ハイ見てくださいこの格好これが現在の私です。

しばらく電飾マネキンが、ピカピカと暗闇に光る。

やがて、その電飾の光りの陰から、プラグスーツを着た男が現れる。

（電力！電太郎のようだが、まったく精気がない……）

電太郎の亡霊……？

「……よくホラー映画で、悪霊や怪物の気配が迫ったとき、電気がチカチカ点滅したり、電球が破裂したり、よくそんな演出を見るじゃないですか。でもなぜ悪霊が近づくと電気がチカチカ瞬くのか、その理由を説明している映画をこれまで一度も観たことがない。なぜか？理由は簡単、ぼくらはいつだって感覚的に納得してるからです、ぼくらは了解してるんだ、電気は、霊的なゆらぎに感応するんだと。理屈じゃなく、直観的にぼくらは分かってる――」

電飾マネキンが、突然チカチカと瞬き、カッと輝いて、消える。

暗闇に支配される――

続・何もうまくいかない日

(明かりつく)

浴衣を着た男が立っている。誰かと言い争っているようだ。

「イヤだからさあ、おかしいだろうって！ここ温泉宿でしょう。温泉宿！温泉宿としてのプライドはどうした！」

「(観客に向かって)いやマジで重なるときは重なってる最中ですよまさに今！2時間55分かけて足引きずりながら宿に着いたばかりを待ってたのは、フロントで(ちょっとしゃくれて)『ようこそいらっしゃいましたあ』——こんな喋りかたをする男でした。倒れこむようにチエツクインしたばくに向かって、男はこう言いました。

「『あいにく今、送電線の断線事故の影響でこのへん一帯停電になっておりますね、ご不便をおかけするかと思いますが申し訳……』いやこちは疲れてんだよ、見りゃ分かるだろ、一秒でも早く部屋に行って休みたいの！ぼくは男から部屋のカギをひったくるようにフロントをあとにすると、部屋に入るなりボタンキュー。で、ほんのすこし体力が回復して、やっと温泉にでも浸かろうかという気が湧いてきたところで、今ココですよ。

「『ですから、停電で温泉も止まっておりましてね、ご不便をおかけして申し訳』『いやおかしいでしょ。電気止まってたって、温泉なんか勝手に湧いてくるだろ』『恐れ入りますが、当旅館の温泉は循環式になっております……』『いや待って。え待って。ここ、天然じゃねえの？温泉』『ハア』『イヤイヤココ温泉宿でしょう。温泉宿のプライドはどうした！』」

「(観客にこっそり合図するように、小声で)今ココ。」「『そう申されましたもね』『イヤ分かりました、じゃ、このへんの近くの、ちゃんと天然でやっている温泉に入れるように、手配してくださいよ』『イヤあ……』『イヤあ、じゃなくて。そのくらいしなさいよ。温泉宿なんだから温泉に入らせなさいよ！もっと看板に責任もて！』『そうしてさしあげたいのはヤマヤマなんですがね、あいにく、このへん一帯の旅館はぜんぶ循環式でして。源泉の湯温が低いもんで』『イヤある？そんなことある？じゃあもうこのへん一帯おかしいよ！温泉って名乗っちゃダメだよアンタら！』」

「(観客に向かって)温泉に、入れないんですってこの温泉宿。温泉街。すこくないですか？今日はもう何にもうまくいかないなあ！」

「『あのおく、そこまで入りたいんですけど、いっただけ入れる温泉があるにはございますが、』
「は、あんの？ あるなら早く言えよ」『ちょっと距離はあるのですが、山奥の、いわゆる秘湯と
いうヤツでして』「あんじゃん。いいじゃん、そっいうんだよ」

「今日はもう、なんちゅうか、その秘湯に入るためにあつたような一日だ。うん。ないよ、なか
なか。だってもし普通の精神状態だったら、山奥の秘湯なんて絶対行かないもんオレ。」

「『マシラ湯ゆうて、地元のもんはそう呼んでますが、カラスが飛び込んだら真っ白な白鳥に
なつて出てきたという伝説があるくらい、見事な白濁湯でね。車でこつからまあ一時間半はか
し走っていただければ……』「いや遠いわ！ 一時間半で。遠いわー、でももう、なんかそれがい
いわー秘湯っぽくて。行く。オレもう行くわそこー！』「さようですか、でしたらばね、車両はこ
ちらでご用意いたしますのでね』」

「つって玄関先で二十分くらいたぷり待たされて、出てきたのがこの電動バイク。「え、車両つ
てこれ？」『こちらのバッテリーがね、メモリがイチしか残っておりませんがね、満タンに充電
したものがメットインの中に入れてございますのでね。メットインの、中に』」

「イヤもうなんか清々しいわ。(と、男がダウンジャケットを着て、ヘルメットを被りながら)彼
女にフラれたクリスマスイブ、浴衣にダウンジャケット着て、この寒空に電動バイクで山道一時
間半。行つたらうじやない。どうせ秘湯で温もったところで、帰りにぜったい体冷えるけどね。
ヘタすりゃ風邪で死ぬけどね。露天の猿になっちゃうけどね。でもオレは行くよ。オレは行く！
なぜなら、これがオレの生きる道だから！

「『道はですね、これをずうっと山の奥の奥まで、一本道でございますのでね。それではお気を
つけて、いってらっしゃいませえ』」

電動バイクのモーター音。

男、バイクにまたがって奥のクローゼットへ。衣装チェンジ。

町の檻、或いは自由と不自由の話

くたびれた背広を着た男が、前に立つ。

どこかの方言だろうか、独特なイントネーションで話しはじめる。

「その日、私は仕事終わりの疲れた体をいつもの通勤電車のシートになげだして、いつしか眠ってしまったようでした。バキュームカーが人糞をバキュームするみたいな、ゴボオオオというびきの音が、自分の口から漏れ出ているのに気づいて目を覚まして、すると、見渡すかぎり電車の窓という窓が、労働者たちの徒労の口臭、感情をおしこめた呼吸、その怨念めいた吐息のために異様に曇っている。そして、その凍った窓の向こうにかすんで見える町並みが、これまた異様に、暗い…？ いつもぼんやり電車から眺める町明かりとは、全く異なる夜の暗がり、次から次に亡霊のように窓の向こうを走り去っていくのに気がきました。

「乗り過ぎました！ そう思った私は反射的に身を乗り出して、車内を見まわしました。乗り込んだ時は八割方うまっていた車内に、人影はまばらで、みんなぐったり寝込んでいるか、スマホの画面を凝視しているか。…電気トラブルのせいかドアの上の電光掲示板は真っ黒で、天井の白っぽい照明も、時々、接触不良を起こしてまたたく。現在地がまったく分からない。スマホを取り出すと、すでに真夜中に迫ろうかという時刻でした。

「マップを開いてGPSで現在地を取得。すると自宅の最寄り駅から二駅過ぎた辺りでした。二駅？ たしかに今の家に引っ越してきて、会社の逆方面へ行ったことは数えるほどしかありませんが、それでもまったく初めてではないし、え、こんな感じの土地だったっけ？ 」と黙っていると電車が速度をゆるめ、駅に滑りこんでいきました。

「私は電車を降りました。何人か一緒に降りた人がいたと思います。そこは初めて降りる駅でしたが、路線図では見た覚えのあるような駅名だったので、安心して、私は向かいのホームに向かうため、いったん北口改札という標識の出ている階段を上りました。ところがその階段は、ふつうのビルなら2階分くらい延々続いていて、どうやらこの駅は、谷底に線路を敷いたような地形に建てられているようでした。階段を上りきると、つきあたりは北口改札。けれども肝心の、向かいのホームにつながる通路がありません。私は階段を引き返すのもおっくうで、そのまま改札を出て、向かいのホーム側からまた駅に入り直すかと考えました。

「改札にSuicaを通して外に出ると、目の前に小さな商店街があって、どの店もすでに電気が落ちたりシャッターが下りたりしていました。振り返ると、改札口の脇には金網フェンスがあって、フェンスの向こうは暗い谷。ちょっと近づいてみると眼下の谷底の暗がり、さっきまでいたホームの明かりがぼんやり浮かんでいるのが見えました。そのホーム

の明かりから、谷の向こう岸の擁壁にそって長い階段が延び、ちょうどこちら側と同じくらしい高さのところに、南口改札と書かれた駅舎がぼつんと口を開けています。向こう岸はどうやら運動公園か何かになっているみたいで、だだっ広い芝生の空間の向こうに、山すそに貼りつくような住宅街の明かりが広がっていました。

「見たところ、谷の向こう側に渡るには、商店街を抜けた先にある橋を渡る必要があります。うです。とりあえず私は歩き出しました。私は、いつだってとりあえず歩き出します。

「商店街は、いまやこの商店街もそうだと思いますが、ひっそりと呼吸をしていました。夜の風が肌寒い。かろうじて街灯はありましたが、それもまばらで、どの街灯にも、光源を覆うくすんだガラス球の内側に、死んだ羽虫の黒い影がたまっていました。

「すぐにごん詰まるような商店街だと高をくくって歩きだしたはいいものの、実際には、予想以上に商店街は長く、歩けど歩けど端（橋）に辿りつきません。私は再びスマホを出して、マップアプリに駅名を打ちこんで、徒歩で経路検索しました。数秒と待たず、ポロン！と音を立てて現在地から駅までの経路がマップに浮かびあがりました。が、マップが示した点線を辿るとそれは私が今歩いてきたばかりの北口改札への経路でした。いや違うわ！と思って今度は駅名にわざわざ「南口」と追加して検索したけれども、結果は一緒。なんだこれ。こういうのが一度でもあるとマップアプリとしての信用性に関わるので是非とも早急に改善されたほうがいいですよGoogleさん。

「という書き込みをアプリの評価欄に投稿したところで、ふと顔を上げると、いつしか商店街の切れ目に立っていて、谷にかかる長い鉄橋が見えました。鉄橋は野ざらし風さらし。冷たい突風が吹きつけて霧笛のような音が地の底から響いてくる。

「橋には街灯がなく、私はスマホのLEDライトを点け、とりあえず歩き出しました。私はいつだってとりあえず歩き出します。

「鉄橋の上は車道と歩道に分かれていたので安心して歩きましたが、当然車どおりはなく、辺りは真っ暗。スマホのライトの範囲を超えると、橋の欄干とその向こうの区別もつきません。谷の底からひっきりなしに聞こえる低い霧笛は、まるで地下に眠る巨人のいびきのように。またそこに混じって、鉄橋の足げたを絡めて抜けていく風のせいで、甲高い怪鳥のような鳴き声ですぐ足もとをすくっていきます。山根会長（※）じゃありません、怪しい鳥のほうの怪鳥です。（※ここは時勢にのっとなって、森会長でも可）

「鉄橋の真ん中辺りまで来たときに、ふと見ると、谷底にぼんやりと小さな明かりが見えました。さっきまでいたホームです。ところが次の瞬間、そのホームの明かりがロウソク

の火を吹き消すように、フツ…と消えたのです。

「アアッ！思わず声が洩れました。でも考えてみたらそうです、時刻も真夜中近いのですから、いつ終電を迎えてもおかしくなかったのです。

「私は橋のうえで、呆然と立ち尽くしました。相変わらず地面の底では巨人が眠り、時々怪鳥（会長）が鳴き声をあげて足もとを滑空してゆく。

「行く手には、彼方の住宅街の明かりが山のすそ野に沿って広がり、来し方にもまばらな街灯の明かりが左右にだらだらと続いている。私はぼんやりした町の明かりにぐるりを囲まれ、もはや先に行くことも戻ることもできません。私はここで朽ち果てていくのでしょう。私はいつだって、こういうところで朽ち果てていきます。

「そのときでした。どこからかジジジ…ジジジ…という不思議な音が聞こえてきました。やがて空がビリビリと震える気配がして、（電飾マネキンがチカチカと瞬きだす）見あげると、頭上に、空を覆うような巨大な電気ナマズが、悠々とからだをうねらせながら、中空を泳ぎ、谷を越え、橋を越え、町の明かりを揺らめかせて、山あいの向こうへ——ゆっくりと消えてゆきました。

「……私の話は以上（異常）です。

男、クローゼットへ。衣装チェンジ。

やがてマネキンの電飾が平常の光りを取り戻し、その陰から電太郎の亡霊が現れる。

電太郎の亡霊、再び

「……未来でプラグレスな生活を試みるたびに自滅する人々は、ぼくらのことをへプラグドと呼びました。プラグにつながれた不自由な人々、という、すこし軽蔑を込めた呼び方です。彼らのスローガンはこうです。「アンプラグドな生き方をしよう！」

「千年前の現代でたとえるなら——たとえば電話での会話はプラグドです。電力なしでは成り立たないから。リモートもチャットもぜんぶそう。対面してするお喋りだけがアンプラグド、プラグドではない。動力のある乗り物は総じてプラグドで、徒歩や自転車はアンプラグド。

ヤンマーで耕した畑はプラグドで、クワで耕した畑はアンプラグド。ブラウン電気シェーバーはプラグドで、シックハイドロはアンプラグド。

「…バカバカしくないですか？ だって、煎じ詰めればぼくらの思考はそもそも電気信号で、ぼくらの感情はとどのつまり電気だ。モノを見るという行為も、声を聞くという行為も、ぼくらの体内に電気がなければなしえない。つまり電力は万物の源みなもとで、世界は電気によって生まれているんだ。今、この瞬間も、まさに。

「分かりますか？ 今、電気が、電気に語りかけてるんだ。

「電気がなければ、ぼくは今みんなの前にすら立つてはいない。ほら——

電飾が消え、ふたたび暗闇に支配される。

山のお社

(明かりつく)

浴衣のうえにダウンジャケットを着こんだ男が立っている。

手には電動バイクのバッテリー(約6kg)を持っている。

男は、かなり疲弊している様子。

「……電動バイクが、止まっちゃいました。…ハイ。

「一時間前のことです。あのフロントの男が言ったとおり、一つめのバッテリーは宿を出発してものの二十分ほどで切れました。でもハイ、そこまでは想定内。むしろメモリいっこの状態からよく走ったほうですよ、こんな山道を。道はね、もうマジで山道っすよ。走ってけっこう序盤で民家がまばらになって、あとは山とか谷の合間に、ぼつぼつ限界集落が貼りついてるくらい。延々と続く、ぐねりぐねった登り道。

「で、メットインの中の、予備バッテリー。つけ替えたらね、インジケーターの表示は満タンになったんですよ、ぼくはバイクを走らせた。…走らせたなア。電動バイクはうなりを上げて、山林のトンネルを山の奥へ奥へ。

「異変が起きたのは、さらに三、四十分くらい走ったときです。(バイクのインジケーターを見て)——あれ? あら? はアツ?

「メモリいつこの状態で、その残りいつこが、プカプカ点滅してんすよ。エなんだこれ、全然充電できてねえじゃん! え、どうすんの? こんなところでガス欠——電欠かよ!

「と思ったら——止まっちゃいました。…ハイ。

「ま、アレっすよ。重なるときは重なるんすよ、知らんけど。マジで知らんけどツ!

「知らんけどツ」の男の声が、山にこだまする。

男、スマホを出して電話しようとするが、圏外になっている。

しばらくスマホをかざして電波を探すが、すぐ諦めて、

「まあ圏外。ハイ。…「アやっぱりね」と思いましたけどね。むしろこれで電波が繋がったら、そっちのほうがビックリだわ。逆に。なんだそれ、つながんのかよ、やる気あんなのか運命! ってなもんで、ハイ、もうオレの情緒ワヤクチャですよ。

「……で、そこから一時間。たしか来る途中、バイクで通りすぎた限界集落までもうすぐだよな、もうすぐだよなと思いつながら、カーブを越えるたびに落胆する日々。ええ。全然つかねーし。コレいつ6kgあるんすよ! ダウンの中、汗びしゃびしゃすよ。喉は渴くわ足は棒だわ。」

「でもオレはね、歩きますよ。今日という日のオレは歩くんす。で歩いてると、いろんなことを考えるんすよ、また。…ガス! …ガスで! …とか。あとはなんちゅーか、走馬灯的なね。」

「子どものとき、『電力! 電太郎』っていうアニメをテレ東でやって。あんま人気出なかったけど、オレは好きだったんすよね。毎回、千年後からやって来て、あの手この手で発電所を破壊しようとするプラグレス集団。主人公の電太郎が、それをへプラグド。パワーで撃退するんです。で、電太郎がピンチになると、電太郎の師匠の改造博士、ドクター・ドクが決まってこう言うんすよ。」

『心の燃料棒を燃やせ! 諦めたら、そこで終わりなんじゃぜ』。

「オレも、足はもう棒だけどね、燃やすんすよ心の燃料棒。そして卒業するんだ昨日までの甘えん坊。長男だからきつとできるハズもう少しの辛抱。オレはもう赤ん坊じゃねえし、茫然とするだけのガキでもねえ、ワキ毛ボウボウ、チン毛もボウボウ、道のはた見りゃ草ボウボウ、
イエ!

「……イヤ疲れてんですってマジで。だってただの1時間じゃなくて、2時間55(分)のあとの

「時間ですからね！もう日も暮れかけてますよ。……カラスも鳴きますわ。」

そのとき、男が何かを発見する。

「——あれ？え、あれ石垣じゃね？あ石段だよホラ！なんか建物あんじゃん。やった。やっ
とだ！着いたぜ人里、だれか呼ぼう！やっと見えたぜオレの希望！」

男、石段に駆け寄るが——すぐに微妙な表情になって、立ち止まる。

「それは、古い鳥居でした。せまい境内のすぐ向こうに小っちゃな社があつて……鳥居には（見上
げて）うっすら、「山」「王」「権」「現」と彫られてるのが読めました。」

「ぼくは昔から、神仏を信じてません。だって（プラグド）じゃないから。よく初詣とかで、お賽
銭箱に小銭投げたりするのをテレビとかで見るとはいいですか。子どもの時からこう思っ
てました。みんなよくあんなものに課金できるな、って。だってフワフワしてて実体がないでしょ
神仏って。（ちよっと考えて）……あでも、それ言うなら Wi-Fi もそうか。イヤでも、Wi-Fi に
はルーターがあるからな。（目の前の社を見て）……あコレがそうか。あコレ、ルーターか……課金
制の。」

「なんかそんなとき。魔が差した、っていうか、仏が差したっていうか、あ神社だから神さまか。ま
あどっちでもいいですけど——お賽銭を、あげてみよっかな、って思ったんです。なんでそんな
アンプラグドなこと思ったのか、自分でも分かんないですけど、まあたぶん疲れてたんですけ
ど、重たい足で石段上がって、鳥居くぐって、神社の社のお賽銭箱に——」

男、お賽銭を上げたことがないので、勝手が分からず、慣れない手つきで、とりあえ
ず財布の中の小銭をぜんぶ賽銭箱へぶちまける。

「わ、キモ。——あ、今の「キモ」っていうのは、お賽銭をあげるといふ行為に対して言ったんじ
やなくて、なんか、財布に入ってた小銭が今、ぜんぶ五十円玉だったんすよ。なにこの意味ない
偶然。キモ。」

「ま、それはいいんですけど……なんか、アレっすね。お賽銭って、イヤ分かってはいたんですけど、な
んか、あげたからどう、って……本当に何にもないんですね。エみんな一回やって気づきませんで

した？ 本っ当に、何も無いですよコレ。いやマジで。——これもアレっすかね。生活の、方向性の、違いなのかなア。……や、っば分かんないわあ。

男、釈然としない表情で財布をしまい、神社をあとにしようとする。

そのとき、社の脇に何か見つけて、なぜか男の動きが止まる。

まじまじとその方向を見つめながら、

「一本松——(ちょっと我に返って)いや、社のわきに粗末な囲いがしてあって、そこに、ぽつんと一本松が立っていました。そんな樹齢何百年とかそういう立派なんじゃなくて、こう、ひょろっこい松が。でもおめかしするみたいにシメ縄がしてあって、囲いのところには「御神木」とって墨書きの看板。

「で、最初気づかなかったんですけど、その一本松の枝に、一匹の子猿がしがみついていたんです。親とはぐれたのか知らないけど、一匹だけ。逃げるでもなく、助けを求めるでもなく、ただじつと枝にしがみつく、子猿。

「なんだろう、それ見てオレ、なんかよく分かんないんだけど、無性にコレ……

アンプラグドだなあ——って思ったんすよ。

「……何が？ 子猿が？ しょぼい一本松が？ 神社が？ 今のこの状況が？

「分かんないけど、なんかいたたまれなくなつて、オレは、神社をあとにしました。

「神社があるってことは集落があるってことです。オレはほどなくして、数軒の民家と、道沿いに建つボロい駄菓子屋を見つけました。案の定、店はもうとつくに閉まってたけど——

「おお！ 駄菓子屋の前に年代物の自販機、発見！

「助かった……！ 水！ お茶！

男、自販機の前に駆け寄り、焦る気持ちを抑えながら財布を取り出す。

が——財布のなかの小銭がすべて消失している。

「ないじゃん……エないじゃん。(紙幣を出して)万札じゃん！ え何やってんの神仏。これは、もう……賽銭ドロボーじゃん！

男、クローゼットへ行き、衣装チェンジ。ダウンジャケットを脱ぐ。

浴衣のうえに羽織をはおって、扇子と、フカフカの座布団を持ち、ふたたび前へ。
その座布団のうえに正座し、深々と頭を下げて――

駄菓子屋問答

「えー、駄菓子屋に見えたるはさにあらず、(大きく)「駄菓子」(小さく)「もあります」と貼り紙の貼られた個人商店。都会風に言やあコンビニエンスストア、と言えば聞こえはいいが、そこはドのつく田舎のこと、しかも時分は日の落ちかけた黄昏時、ガラス戸越しに覗く店内は電気が消えてすでに真っ暗。

「(ドンドンドン、と戸を叩いて)ごめんください、どなたかいませんか? ごめんください。」

「…ごめんくださいーい！」

「何だい何だい何だい、やかましいねえ。」

「奥から出てきたのは身の丈三尺五寸ばかりのちっちゃな老婆。」

「どこのどいつだい、考えなしに戸をどつきやがって。ヤモリモへそ見せちまうよ！」

「(ガラス戸越しに)すいません、あの、お願いがあります。水かお茶を、いただけませんか?」

「今日はもう店じまいだよ! 停電はするわ家をどつかれるわ、さんざんな一日だよ！」

「あの、そこを何とか。ちよっと、のっぴきならない事情がございまして……」

「のっぴきだかへっぴりだか知らんがね、ババアの眠りを邪魔する奴は地獄に落ちな! ゴー・

トゥ・ヘル!

「ところが、私にはあなたが、地獄で出会った仏に見える。」

「失礼なヤツだね。わたしやまだまだ仏になっちゃいないよ。(と、ガラス戸を開ける)何だいア

ンタは。

「ああ、ありがとうございます! 実はですね、あの――

「かくかくしかじかと、男が今朝からここまでの一連のアンプラグドな出来事をつらつら話し

ますと、話が終わるや否や、

「…長げー。話長げーわ。古い先短いババアの寿命をアンタ、どんだけ削る気だい。」

「イヤなので、かくかくしかじかという言葉で、キュッとコンパクトにまとめた次第でして、

「知らないよ。いやあのね、アタシも鬼じゃないんだ。アンタの境遇はだいたい分かったよ。」
「え、それじゃあ、

「けどね、アンタもまあ憑いてない男だね。ご覧のとおり、この辺はもうヒトよりも猪や猿の出入りのほうが多いような部落だ、停電の復旧も後まわし、あいにく今晚はもう電気は点かないよ。」

「え、そんな、(アンビリバーボーみたいな口調で)アンプラグド……!」

「なんだい？」

「いえなんでも。」

「とにかくね、充電はさしてあげられないけど、その代わり、アンタにゃホレ、そののを売ってやろう。」

「と老婆が指さしたのは、店先の古ぼけた冷凍ヨーケース。」

「そんなのもん、好きなだけ持ってっていいよ。お代はこんだけいい(と一本指)。」

「男がヨーケースの中を覗きこむと、中にはジャンボモナカやらアズキバーやら。」

「アイスじゃないですか。」

「アイスだよ。腹が減ってんだろ？ 喉渴いてんだろ？ チューチューもあるよ。好きなだけ持っていくよ。」

「いやフツーにお茶売ってくださいよ!」

「我がまま言うんじゃないよ!」

「いや我がままですか？ 我がまま？ 店でお茶、売ってますよね？」

「今は売ってないよ。とくに閉店してんだ。そんなのもんなら売ってやる、つつてんだよ。」

「どっちが我がままですか！ それに、これ……(とヨーケースの中に腕をつっこんで)ほらやつぱり！ 停電で溶けかけてるじゃないですか！」

「溶け、かけてんだよ。溶けちゃいないよ。腐っても鯛!」

「いや減茶苦茶じゃないですか。なんだこの店。このご時世ね、そんなことやってたら、すぐ炎上しますよ。」

「こんなト田舎でどうやって炎上すんだ。限界部落に恐るるものなし。」

「マジかこのババア。」

「どうすんだい。買うのかい？ 買わないのかい？」

「う~~~~~、分かりました、買いますよ!」

「はいまいど。(とお代を要求)」

「(財布から一万円札を出して)はい!

「(お代を受けとって)じゃあ買ったらちゃんと戸を閉めて出てっておくれよ。アデュー。

「いやちよつと、お釣りはツ? おい。婆さん! ババア! ……マジかよ。え…なんだこれ。こなんなんあつても食わねえよ。(商品を一つ一つ確かめながら)板チョコモナカ、ホームランバー、べとべとじゃねえか、センチタンあいすくりん、スーパープレミアムソフトWバナリッチ、長げーよ、ガリガリ君、ブラックサンダー味…? プライドねえのかよ(などどぶつぶつぶつぶ言いつつ、ダウンジャケットのポケットに詰めるだけアイスを詰めて)…え、どうすんのコレ、服、パン、パンじゃん。(と言いつつ、店をあとにして歩きだす)もー何? これで、バッテリー担いで、宿まで戻んなきゃいけないわけ? なんだコレ、なんだこの状況ツ? マジで叫びてえよ。ああ何だ、寒みーし。すげー寒みーし。うわ何この衝動。抑えがたい衝動が、腹の底から沸々と。叫びてえ! 大声出して叫びまくりてえ。よし、もういい、今さら恥も外聞もねえ、もうありったけの声で叫ぶぞ、よし叫ぶぞ、そうだ英語で叫ぼう——

「アイ、スクリーム。お後がよろしいようぞ。

男、一礼してクロゼットへ。衣装チェンジ。

害獣駆除業者の話

つなぎの作業着を着た男が前に立つ。

「——ええ、そう、猟銃は言うまでもなく免許が必要でしょ。わなを仕掛けるにもね、わな免許が必要。そもそも捕獲するだけでもね、じつは都道府県知事の許可が必要なんですよ。ええ、鹿も猿も猪も、ヤツら鳥獣保護法で保護されてるから。勝手に捕まえちゃダメなの。だからね、私ら一応、”駆除業者”と名乗ってはいるけど、実際は、追い払うことしかできないの。畑に降りてこないように、シッシツて。あとは防除策ね、電気柵立てたりとか。

「猿はね、賢いですよー、とくに賢いですよ。ヤツら手を使えるから。知能も高いしね。カカシとか普通の柵じゃまあ無理ですよ。ヤツらはね、群れをメスが仕切ってるね。で代々、その縄張

りを子猿に引き継いでいくわけ。メスの子猿ね。オスはほら、いずれよそに行っちゃうから。だからね、まずは人里は危険だ！ ってボスのメス猿に思ってもらって、それを子猿に引き継いでもらえば、当面、猿が山から降りてくることはないわけ。

「うん。あなた、なんとなく野生の動物は、自由だと思ってるでしょ？ 世間一般、なんかそう思ってる節がありません？ 森は過酷な環境だけど、少なくとも動物園みたいに不自由じゃない、って。でも私に言わせればね、どっちもどっちですよ。見えない鎖、って知ってます？ 野生動物はね、いろんなものに縛られてるんです。まず飯場めしばでしょ。安定した飯場なんてそうそうないから、簡単に捨てることなんてできない。で、縄張り。勝手によその群れの縄張り荒したら攻撃されますからね。死活問題ですよ。命を危険にさらさないためには、見えない鎖の圏内で、おとなしく生活するしかない。そういう意味じゃね、動物園と一緒にですよ。どっちも「フリーダム！」ってわけにはいかないんだから。檻が見えてるか、見えてないかの違いなだけ。

「……はい？ ……露天風呂？ ああ、猿も入りますね、たまには。……凍死？ しませんよ。凍死するんじゃ入る意味ないじゃないですか。いやあのね。さっきも言ったけど、猿は馬鹿じゃないの。猿の毛はね、密度が高いんですよ。なんで濡れたままお湯から出ても凍るのは毛先だけ。体温はちゃんと保持されるから、凍え死ぬなんてことはないんです。

「誰ですか、そんな馬鹿なこと言ったの？

男、クローゼットへ。衣装チェンジ。

猿の襲来

スマホのLEDライトが、暗闇をキョロキョロ照らす。

男が、その明かりを頼りに前へ。浴衣のうえに着こんだダウンジャケットのポケットは、ぱんぱんに膨れあがっている。

「見ての通り、状況は、悪化の一途。

「完全に日が暮れるわ、風は馬鹿みたいに冷たいわ、ダウンはなんかもうベトベトだわ、あの駄

菓子屋の集落を越えてから先、いつも民家ないわ、もうずっとずーっと山林。で、もっと悪いことですよ——ま、コレはオレも悪いんですけどね、道路のガードレースに、切れ目があったんですよ、見つけたんです。

「覗いてみると、下にくだる階段があるわけですよ。山道って、こうじゃないですか(と、手で蛇行する道路を描く)。そこにこう、階段があるわけですよ(と、蛇行する道路をずどんと縦断する階段を描く)。これ、地元の人がショートカットするために作った階段だな、って思うじゃないですか。歩いて山おりの人のために。でまあ、それは間違いじゃなかったんですけど……」

男、やや躊躇して、道路を逸れて階段を下りていく。

「実際足を踏み入れてみると、ちゃんと階段が作られてたのは、勾配が急なところだけだよね。あとは何ていうか、獣道。もう完全に森のなかを歩いてるわけです、気づけば。夜の森って——(鳥の声に驚く)なんだッ! ……なんっつか、(また驚く)なんだ、このアンプラグドな状況は! いやないですよ、ナシですよ、オレの人生のなかでコレは。」

男、物音がするたび、ビクつきながら歩く。

怖さを紛らすために、鼻歌をうたう。それは『電力! 電太郎』のテーマ曲である。

「電太郎、心の燃料棒を燃やすんじゃ!」

「ドクター・ドク、Nリアクターの故障で、荷電粒子砲の起動に電力が足りません!」

「なんじゃって!」

「伝令、ヤシマ動力炉が危険水域! 炉内の圧力上昇! コードレッド!」

「クソ、燃料棒がドロドロじゃあ(と、ダウンジャケットで手に付いたベタベタを拭く)

「電太郎、早くせんとメルトダウンじゃよ! (とスマホのLEDライトをグルグル回して) ウィンウィンウィン! 必要な電力量はあとなんぼじゃ?」

「荷電粒子砲の起動まで、あとー。2ージゴワット——」

そのとき、猿の威嚇する声が間近で聞こえる。

「わッ! ……ナニ、誰!」

男、スマホの光りを向けるが、茂みの向こうに何も見えない。

すると突然、「キイツ」という声とともに背後から衝撃。猿が背中に掴みかかってくる。

男、猿を振り払うが、どうやら複数の猿がいるらしい。

金切り声が森に響く。

「猿ツ？ わ、クソツ！」

男、重いバッテリーを振り回して奮闘。しばし猿との格闘。

「どうやら猿の目的は、ぱんぱんに膨れたダウンジャケットらしい。エサを隠していると思われたのだ。男は何度も猿に襲われ、たまらずダウンジャケットを脱ぎ捨て、バッテリーを投げつけて逃げだす。」

「(スマホで前方を照らし、動画のライブ配信風に)猿だ、猿の襲来です！ かつてこんなことが我が人生において遭ったでしょうかツ？ なんてアンプラグド！ 猿は、オレのダウンを奪ってなお、…追いかけてきます！ 追いかけてきます！ ヤバ、ヤバ——(男、大木の陰に隠れて、息を整え)なおも追撃してくる模様！ くそ…(と男は、苦しまぎれに木によじ登りはじめる)こんな…ところで…死んでたまるか…:燃料棒を燃やせ…燃料棒を燃やせ…燃料棒を燃やせ…燃料棒を燃やせえ！——」

猿の威嚇する声が、しだいに遠ざかっていく。

危機を乗り越えたようだ。

「——気づくと、オレは木のでっぺんにしがみついていた。そこは、ちょうど山の中腹あたり。眼下に、ふもとの町の明かりが見えました。…町の、明かり。」

「…:…見るんじゃ電太郎、町に電力が戻ったぞ。あれこそ、ワシらへプラグドの光りじゃ…:…」

男、町の明かりにしばし見入って、

「肺が熱い。喉がヒリヒリして…:声、なんかヘンじゃないですか？ ア、ア。」

「ふと視線を移して、顔を強ばらせる。青ざめた顔で、宙をじっと見つめて」——暗がりに、目玉がふたつ、浮かんでいました。イヤ、よく見るともう二つ、四つ、八つ——!

「周囲の暗がりに、数えきれない目玉が——とり囲んでいました。息をひそめ、じつとこちらを窺う目玉の群れ。(男、スマホのカメラを起動させ、周囲に向けてフラッシュを焚かずにシャッターを切る。木にしがみつきながら今撮った画像を確認し、声をひそめて)猿です。猿の群れです。」

「……オレは、静かに、音を立てないよう、彼らを刺激しないようにもぞもぞ木から降りて——というよりゆっくり時間をかけてズリ落ちて、地上に降り立ちました。」

男、地に足が着いてちよつと気が大きくなってしまったのか、今度はフラッシュをオンにして、樹上にスマホカメラを向ける。シャッターを切ったとたん、猿の金切り声。

男、あわてて駆けだす。

(明かり消えてゆく)

暗がりにスマホのLEDライトだけが乱暴に跳ねまわる。

「オレはそうして闇のなかを駆け、なんとか猿の群れを振りきって、山林を抜けたのでした。」

電太郎の亡霊、みたび

電飾マネキンが光りだす。

その陰から現れるのは、ご存じ電太郎の亡霊である。

「——夜を照らす家々の明かり。その家のどれにも、決まった形、決まった規格のコンセントが存在する、なぜなら、コンセントにプラグを挿せば電力を得られるから。では、その電力はどこから来るのか？ もしろん壁のなかの配線のゆくえと屋外へと延びた電線を辿れば、そのおおもとを突き止められはするだろう。しかしそれは真実とは呼べない。」

「今日はみんなに真実を教えよう、電力はね、コンセントの奥、壁の向こうに拡がる果て

しない暗がり、無限なるタルタロスから供給されているんだ。タルタロスとは常闇とこやみ、流動するエナジーの源泉。そこではつねに電気が原始の姿で蠢うごいている。きみの住む家の、壁のすぐ向こう側で、電気は絶えず蠢うごいているんだ。

「ほら、耳を澄ましてごらん。聴こえてくるだろう、電気の吐息が――

音楽が聴こえてくる。

それは、アニメ『電カ―電太郎』のオープニング曲の前奏である。

どこかからワイヤレスマイクを取り出して、男が熱唱する。

電力！電太郎のテーマ

地熱！ 風力！ 原子力！

電化人間 電太郎

愛犬はビリビリビリー 省エネ性能5つ星

改造博士の頭はショート 愛と電気が友達さ

勝ちぬくんだ 電力自由化

めげるな 夢の高速増殖炉

「心の燃料棒を燃やせ！ 諦めたら、そこで終わりなんじゃぜ」

水面（みなも）に咲いた青き花

必殺！ チェレンコフ放射！

地熱！ 風力！ 原子力！

電化人間 電太郎

危険！ 感電！ アース線！

時を戻そう ジゴワット

町の電気が果てるまで

闘え 電力！電太郎（スパークキング！）

負けるな 電力！電太郎（トラッキング！）

でも 夕陽が落ちたらば お家に帰ろうぜ

あの坂のぼれば見えてくる 家の明かりがあつたかい

あの丘のぼれば見えたホラ 家の明かりがあつまって

町の明かりがあつたかい

町の明かりがあつたかい

人類50円おじさん

33

曲が終わると男はプラグスーツを脱ぎ、ブリーフ一枚になる。クローゼットから大き

なスタ袋を取りだし、肩に背負った男は、道行く人々に声をかける。

「人類か？…人類か？…お前、人類か？…人類か？ 人類か？ 人類か？…ア

ンタ人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ 人類

か？ 人類か？ 人類か？ 人類か？ —— 人類か？

「（スタ袋から硬貨を出して）はい、50円。」

男、クローゼットへ。

クローゼットの奥から賽銭箱を引っ張り出してきて、スタ袋の中身をジャンジャラッ

ちまけると、袋を電飾マネキンの頭に被せ、さらにマネキンを賽銭箱の上に置く。

電飾男、の誕生

ブリーフ一枚の裸の男が、前に出る。

片手には固くスマホ握りしめて。

「猿の群れから逃れて山林を抜けると、そこは民家の庭先でした。

「ト田舎特有の、無駄にだだっ広い庭。道路との境にはフェンスの代わりに生垣や庭木が生い茂っていて、敷地の境界が不安になるくらい曖昧な感じ。まあ、山ん中をデタラメに逃げ回ったわりに、遭難、という最悪の事態だけは免れたようです。とりあえずは。

「とは言え、安心も安堵もできる状況じゃありません。ふもとの旅館まではまだまだ遠く、この集落も、多くても十軒かそこらの限界集落に違いはない。何よりも……さむ！ なんだこの格好！ 浴衣まで猿どもに追い剥がれて、これじゃあ……まるで、変態じゃないか！

「(寒風が吹きつけ、身を固くして)おう……とにかく、何とかしなきゃ。(キョロキョロあたりを見まわして)周囲の寂れた村落に似つかわしくなく、山林に面したこの家は、都会でよく見るようなボックス型の新築の戸建てでした。外壁は黒っぽいサイディングで、あ！ エコキュートあんじゃん！……これはたぶん、太い親をもつ地元元ヤン夫婦か、ご隠居気分て田舎に越してきた富裕層の年寄りかのどっちかでしょう。」

そのとき、賽銭箱の上の電飾マネキンがピカピカと光りだす。

男がその光りに気づいて、炎に誘われる蛾のように寄っていく。

「(電飾をしばし見上げて)庭に、でっかいクリスマスツリー……。……をしつらえちゃうあたり、どうやら元ヤン夫婦の線が濃厚。旦那は土建屋かなんかで意外に稼ぎがよくて、まあ子どもを次から次にポコポコ作るんだ。

「どうする？。ピンポン押して、助けを求めるか？ いやムリだろ。パンツいっちょで元ヤン夫婦は無謀だろ。え、じゃどうする、エどうする？ (と、突風が吹きつけ)おう……！とにかく、この寒さ何とかせんと、死ぬぞ。フツーに死ぬぞオレ。」

男、たき火にあたるように、苦しまぎれにクリスマスツリーの光りに両手をかざす。
さらには寒さに耐えかね、電飾を剥いで、自分の体に巻きつけていく。

「うん、うん…うん、…熱くもなんともねえな、LED！なんてエネルギー効率がいいんだ！
…うん、うん、ウン？ あ、でもなんかちよびつと、あつたかい気がする…これはなんだろ、
電気のあつたかさかな？（なんだか安らかな顔になって）電気っていいな…電気って、マジでい
いな…ありがとう電太郎！

男、ウトウトして、カクンと寝落ちしかける。

「あぶねえ、死ぬぞ。マジで。エどうする？どうするよ？（と、手もとのスマホを見て）——あ、
そっか。旅館に電話すりゃいいんだ。そうだよ、オレ頭わりー。そもそもアイツらのせいでこん
なことになってんだから、迎えにくらい来るだろ。なんで気づかなかったんだろ。」

と、スマホで電話をかけようとするが、当然のように電波が圏外。

「くそ、マジか」と嘆きつつ、スマホを宙に掲げて電波を探しはじめる。

ときどき、電飾のコードに引っ張られて、舌打ちをしながら。

「——っっていう感じで、ハイ。今ココ。っっていう。そんな感じなんですけど、ハイ。」

「分かつ——てもらえましたかね、ぼくが、怪しいもんじゃないってこと。ええ。5分——じゃ話
れなかつたですね、とても。でも分かつてもらえましたよね？」

「いや…ホントあるんすねー、こういうこと。信じらんないですよね、オレも信じらんないもん
いまだに。こんな一日、あるもんなんですわ、マジで！…でもね、なんか、身に染みまし
たよ、正直な話。なんちゅーんでしょ。イヤ、あなたにこんな話してもアレなんですけど、こ
んなことになって、今、一番何が欲しいかってね。あんとき食べなかった、彼女のあのあつたかい
シチュー。ガスとか電気とか、そんなのどっちでもいいよ！っ…今なら思いますがもん。
いやIHであつたためたら、そりゃ尚いいけど。でも、ガスでも全然食べますもん。今なら。」

「なんだろ、でももう、遅いのかな…どう思います？いま謝れば、まだ間に合うんじゃない
かとか…どうですかね？ねえ。——ねえって。」

「（何の反応もないのを見て）ねえアンタ、さっきからひとつ言もしゃべってくれないけど、ちよ

とくらい、何か言ったらどうだ！ あ、もしさっきの元ヤン云々のくだりを気にしてるんであれば、アレはごめんなさい。ぼくの失言でした。でも、こんだけこっちが真剣に話してるんだ、相槌くらい返してくれたって、バチは当たらないだろう。違いますか？

「……………なあ。おいつて！」

それでも反応がない。男、不審に思って、スマホのライトを点け、おそろおそろ客席のほうへ向ける。ハツとする男。

「——えッ、松の木？ 松…え？ オレ、ずうっと——庭の木にしゃべってたわけ？（ひと通り客席を照らして）え、木じゃん。ぜんぶ庭の木じゃん。そりゃ、しゃべるわけねーか。なんだこれ。エなんだこれ。」

「……………なんて日だッ！」

男、やってしまったから後悔する。

「え、じゃあ、何？ この気持ちは、コレどう処理すればいいの？ え、いろいろありすぎてもう收拾がつかねーわ。パニックだ。え、こんなに自覚のあるパニックって、あるんすね。」

男、スマホのLEDライトをグルグル回して、

「ウインウインウイン！ ドク！ ドクター・ドク！ どうしよう、もう事態はワヤクチャだ！」

「諦めるな電太郎、心の燃料棒を燃や——」

「アンタそればっかだな！ それどこの話じゃないんだ。炉心はもう溶けてんだ。底が抜けてんだ。」

「落ちつくんじゃ電太郎、こんな時こそ、しっかりと心の制御棒を——」

「うるせえジジイ！ テメエ、さつきからそれ、全然うまいこと言えてねえからな！」

「エエエッ？」

「えええ……………？ うわ頭いてー。もー全然なんも考えられん。やべー。オレ死ぬのかなー？ このまま。え、こんな格好で？ 『電飾男、民家の庭で凍死』——え何それ。そんな見出し絶対グリックすんじゃない。何万ビューいくんだよ。…で、彼女もその記事読んで、オレの死を知るのか

な？……ヤベー。声が聞きたい。うわ、いま声が聞きたい。純粹に。彼女の声。え何で電波きてねえのツ？意味ねーじゃん。人類がスマホ開発した意味ねーじゃん！電波！電波！

と、スマホを宙に掲げて電波を探しまわり、案の定コードが延びきって邪魔されるが、男はついに電飾のコードをコンセントから引き抜き、自由の身となって、なおも電波を探す。電飾が消え、うす暗いなか、

「あ、立った！立ったぞ！一本立ったぞ！ありがとう基地局！

男、すかさず彼女の連絡先を出してコールするが……

「え？——あれ？嘘だろ、おい！おいッ！

男がスマホをガンガン叩く。

こんなタイミングで、充電が切れてしまった。

「え、嘘じゃん。なんて、今までーOパーあつたじゃん！なんて切れんの？せっかく電波立ったのに！なんだよマジで今日おー！今日よおー！

と男は膝から崩れおちる。両手を地面について「今日おお」となる。

そのとき。

——男の手が、土の下の何かに当たる。

男、急に庭の土を掘りはじめ、それを探りあてる。

「コード？え充電コード！マジで？え…ええッ？（男、混乱しつつも）うわ、充電コード、獲ったどー…！エなんで？コワ！ま、いいわ。よう分からんけど、今日はもう何でもいいわ。

とぶつぶつ言いながら、壁のコンセントに、充電コードのプラグを挿す。それからコードのもう一方の端子をスマホに挿そうとして——ガックリ。

「え、何なん今日！これアンドロイドの充電器ですよ。オレの 아이폰 と合わへんやん。何なん今日！え、合わへんやん。これじゃプラグド、できまへんやん！マジで何なん今日！奇跡起こすんなら半端なことすんなや！

と、天に向かって吠える。遠くで野犬の遠吠えが響く。

すると、それに呼応したかのように、男の裸に巻きついた電飾が、

ジジ…ジジジ…と明滅しはじめる。

「え——何？何、今度は何？うわ、なんだアレ！え、ええッ…電気ナマズ？えええええ（と引く）

電飾の光りが俄然、輝きを増す。

ふと見ると、男の手に握られたスマホの画面も光っている。

「え、なんでッ？使えんの？もう何でもアリかよ今日！分かったぜ今日！じゃあもうこの勢いで仲直りしてやるぜ今日！いくぞ電波！彼女とオレをつないでくださいー！

と通話ボタンを押す。しばしのコールがあつて……

「あ、もしもし？うんオレ。ごめんね、こんな時間に。——アまだ八時？そっか…えマジで？エまだ八時なの今？…あゴメン、今日、ホントいろんなことがあつてさ。うん。…イヤたぶん、きみがいま想像した、30倍くらい、いろんなことがあつて。うん。

「あのね。今朝、きみに別れるって言われたじゃん。あれから、まだ24時間も経ってないけど、ホントにマジでいろいろ——イヤ、今はもうその話はしないけどさ、ある意味、奇跡だよ、今日という日は。アンプラグド・イン・ワンダーランドだよ。

「…うん酔ってない。酔ってないよ。飲んでない。うん一滴も飲んでない。

「あのね、聞いて。オレ、もう思ったこと全部言うね。ちょうど頭も回らないし。オレ、きみと別れたくない。きみが好きだ。…うん聞いて。別れたくないんだよ。オレね、もう一回きみに告白して、もう一回あらためて付き合いたいくらいなんだ。マジで。心機一転で。

「…うん、いやダメなのは分かってるよ。だって、アレだもんね。方向性が違うんだもんね、生活

の。うん、それは分かった上で、聞いて。踏まえた上で、聞いて。オレときみとはさ、プラグドなんだよ。…プラグド。なにそれじゃなくて。ほら、コンセントにプラグを挿すみたいにさ——いや下ネタじゃないよ！こんなとき下ネタ言う人いないよ？

「だってさ。だってね。人なんて、いつ死ぬか分かんないんだよ？ ホントに。『電飾男、庭先で死す』だよ。いや何言ってるか、きみには分かんないだろうけど……酔ってないって！ そうじゃなくて——今オレ裸なんだよ！ 民家の庭先で！ イヤ何してんのじゃなくて、電飾がもう、ぶかぶかしてんだよ！ オレの体に巻きついて！ 空にはでっかい電気ナマズが飛んでるよ！

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「きみは、かけなおすと必ず出てくれるからエライね。…オレが？ …自殺しそう？ しないし、ない！ しないよ自殺なんて。ちょっと今、自殺行為——みたいにはなってるけど。」

「イヤだからさ、もう、そういう人生なんだよ。人生っていうか——聞いて。今日という日は、きつと誰にでもあつてさ、だからゴメンね、ガスとか電気とかうるさく言ってる。人はどうしたって生きていかなきゃなんないしさ、どんなに寒くても、あつたかくなりたいし、だから、生きてたら、電気を求めるもんね、オレは。どうしたって電気を求めてしまうもんね、…オレは。だから……ゴメンね。」

「——きみはさ、オレの電気だったよ。」

男、スマホを耳から外し、画面を操作しはじめる。

ふたたびスマホを耳にあてて、

「うんゴメン、今のはキモかったね。…ハイ。」

「……うん、だからまあ、言いたいことはそれだけ。…うん、はい。」

「うん、明日は休み。…そうだね、ゆっくり寝なきゃね。うん、はい、はい。…じゃ、きみも風邪引かないようにね。ハイ。ハイどーも、じゃ失礼しまーす。」

と、電話を切り、宙を仰ぐ。

「アーーーーーッ、ままならねーーーーッ！」

「いや、なんだろう、もう頭バグってんのかな、やっぱ。なんか今、すげー清々しいよ。清々しいんだ、松の木さん。すげー清々しいのオレ、今。なんだろう、もう……こんな、いらぬもんね！」

と、スマホを放り投げる。

さらに体に巻きつけた電飾を自ら剥ぎとり、投げ捨てる。

「あーさっぱりした！ さっぱりしたよ松の木さん！ オレは今、アンプラグドだあー！」

叫んだあと、男はふと怪訝そうな顔つきになり、

「……松の木さん。オレ、今ちょっとビックリしてるよ、自分で。何に驚いてるか分かるかい？ オレはね、今、今のこのアンプラグドな気持ち、なんちゅーか、ナツカシーって感じてるんだ。分かる？ ナツカシー。懐かしさが心に沁むよ。」

「オレは知ってたんだ、この感覚。オレ知ってたんだ。」

「幸せは、アンプラグドだ。電気につながれようが、ガスにつながれようが、幸せはアンプラグドだ！ 寂しさもアンプラグド！ 寒さもアンプラグド！ 空腹も、悲しみもアンプラグドだ！ 虚しさも、孤独も、悔しさも、恥ずかしさも、妬みも、恨みも、失望も、喜びも、嬉しさも、楽しみも、やるせなさも、どこまでも、どこまでもどこまでも、どこまでもオレたちは、
——プラグドだ。」

右のセリフの最中、床に転がった電飾の光りはチカチカはげしく明滅し、
それから消失する。

(了)